

安倍文殊院騎獅文殊菩薩及脇侍像考

増田政史（慶應義塾大学）

奈良・安倍文殊院に安置される騎獅文殊菩薩及脇侍像（以下、本像）は、十三世紀に快慶によって制作された。文殊菩薩が脇侍を従える群像形式は、文殊菩薩が中国・五台山に住むという信仰に基づくものであり、一般に「五台山文殊」として理解されている。先行研究では、宋代仏画を手本に本像が制作された可能性とともに、銘文中に見える俊乗房重源の構想に基づく鎌倉時代の東大寺再興事業における記念碑的造像であったことが指摘されてきた。本発表では、先行研究を踏まえながら、その図像表現と制作背景に焦点を絞り論じてみたい。

まず、文殊菩薩像の持物に着目するとき、宋代の五台山文殊の彫刻や絵画では、通例、如意を執るのに対し、本像では蓮茎と利剣を執っている。もとより、両持物は鎌倉時代以降の五台山文殊の作例に多く認められるが、本像がその初期の作例であることは見過ごすべきではない。従来、その図像表現については宋代図像をそのまま受容したとする見方があるが、むしろ当代の密教事相において両持物についての言及があることは留意すべきであろう。

次に、制作背景について、文殊菩薩像内の銘文中に記される重源は、快慶作例に多く関与しており、先行研究で指摘される通り、本像においても重源の差配があったことは事実であろう。しかし、像内の銘文中には名前が見えないものの、納入品に記される本像の発願者であった東大寺僧・慧敏の存在は看過できない。慧敏については行実の詳細が不明であることから、これまでほとんど顧みられることがなかった。しかし、発願者である慧敏の造像への関与について改めて検討する必要がある。慧敏は大阪・一心寺所蔵『一心寺一行一筆結縁経』に光明山寺の僧として名を留める。光明山寺は東大寺の別所であり、平安時代に東大寺の著名な浄土信仰者たちが住しており、以来、東大寺系の浄土信仰の伝統を培ってきたとみられる。その光明山寺の僧を名乗ることは、慧敏の文殊信仰を考える上で等閑視出来ない。ここで留意したいのは、彼らの浄土信仰、すなわち華嚴世界のなかに立ち現れた浄土思想が、「普賢行願讃」に依拠することにある。「普賢行願讃」は仏駄跋陀羅訳『文殊師利発願経』、不空訳『普賢菩薩行願讃』、般若三蔵訳『大方広仏華嚴経入不思議解脱境界普賢行願品』などのなかに記される偈文で、文殊菩薩の発願による浄土信仰を説く。その「普賢行願讃」に依拠する南都浄土教の伝統においては、文殊菩薩は浄土信仰を説く存在として捉えられていた。慧敏発願の本像もその思想に立脚するものであろう。

これまで、東大寺における快慶の造像活動について、専ら重源を中心とした浄土信仰集団との関係性のなかで論じられてきた。しかし、快慶に造像を委ねた発願者である東大寺僧・慧敏の存在を重視するとき、東大寺や南都浄土教の集団と快慶の関係についても別の捉え方が提示できるように考えるのである。